実践交流
小学国語
―全学年―

「読解表現力」を高める国語科学習指導
―「木の読み」「森の読み」を取り入れた単元構成の工夫を通して―

福岡県春日市立春日小学校　阿戸　雄樹

一　「読解表現力」を高める

基本的に、学習内容は読んで考えただけでは自分の知識や経験として定着しないため、読解する過程で生まれ出た自分の考えを表現することが必要である。文章の意味を読みとることと表現することとは、ほぼ連動しているととらえることができ、これら二つの力を一体のものとした「読解表現力」こそが、自分の読みをより豊かなものにしていくために求められる力だと考える。

二　「木・森の読み」を取り入れた単元構成

読解表現力は文章を読んで自分の考えを表現することの繰り返しによって高まる。その活動を成立させていくためには、読んで表現することへの意欲が生まれ、単元を通しての共通の課題である「読みのめあて」に向かって常に思考が連続していく活動内容であることが望ましい。

また、「読みのめあて」の達成までの自分自身の到達度を把握できるように、学習内容のふり返りを活動の節目に位置づけることが大切である。そこで、学習してきた内容を一つ一つふり返って整理し、また学習しては整理するといった一連の活動を、木々を集めて森をつくることにたとえ、「木の読み」「森の読み」と名付けた。

○「木の読み」

「木の読み」とは、「読みのめあて」の達成のために必要となる部分について読んで表現していく一単位時間の活動のことである。この「木の読み」において、自他の読みを大切にする学習ノートの積極的な工夫を促し、かつ学習ノートの活用が苦手な子どもへの対応として、次の三つの項目について改めて確認し、毎時間心がけるように指導した。

①自分の読みとそれがもとづく根拠を本文中から書き抜く場をつくること。
②お互いの読みを出し合った後、友達の読みを書き込む場をつくること。
③最後に自分の読みをまとめ、はじめの読みと比べること。

また、学習ノートを活用していく上でのモデルとして数人の子どもの学習ノートを提示し、ノートを工夫することのイメージをつかみやすくした。

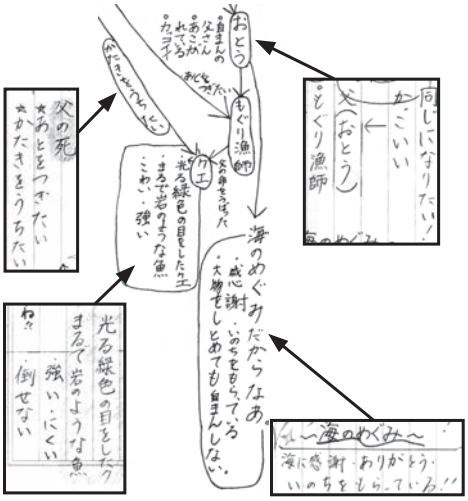
○「森の読み」

単元全体における現時点での学習内容を整理する「森の読み」については次の三つの活動で構成している。

①「木の読み」で学習した内容をイメージマップで整理すること。
②整理したことについて交流し、まとめ方のよさを認め合うこと。
③次時の学習活動を確認すること。

現時点での学習内容を整理した子どもたちは、次の新しい「木の読み」へと進んでいく。そして、「森の読み」で整理した内容は「木

の読み」における前時のふり返りや自分の読みづくりなどで生かすことができる。また、活動①②において、具体的には「森の読みプリント」と名付けたイメージマップのプリントを活用し、子どもたちのノートに貼らせた。



単元は読みのめあてをつくる「見通す」段階、めあての達成に向けて読んで表現する活動を繰り返しながら読み進めていく「深める」段階、学習した内容や読み方を他の活動に発展させていく「広げる」段階で構成しているが、その中の「深める」段階に「木の読み」と「森の読み」を交互に仕組んでいくことで、読解表現力を高めることをねらいとしている。

三　単元「人物の生き方を考えよう」から

題名読みや冒頭読みをもとにして「太一の成長について読み取り、クエとの関係について考えよう」という読みのめあてができた。そこで、子どもたちが主人公である太一を視点として物語を追っていけるように、「太一史」をつくり、起きた出来事・登場人物とのかかわり・クエとの関係など、成長していく太一の生き方に影響しているものを読みとっていくようにした。本単元では、この「太一史」が森の読みプリントにあたる。

深める段階の単元計画

①太一が漁師になりたい理由について考える。
②森の読み
③与吉じいさに弟子入りした太一が教わったことについて考える。
④与吉じいさの弟子になって何年もたち、太一がどのように成長したかについて考える。
⑤森の読み
⑥父の瀬にもぐる太一の心情について考える。
⑦太一が瀬の主を前に泣きそうになっている理由について考える。
⑧森の読み
⑨太一がなぜクエを「おとう」と呼び、対決しない道を選ぶことができたのか考える。
⑩村一番の漁師として生きる太一が考える「海のいのち」とは何か考える。
⑪森の読み

子どもたちは、冒頭で漁師になりたいと言っている太一が「村一番の漁師であり続けた」という物語のゴールに向かってどのような生き方をしてきたかについて読み進めていった。「森の読み」をするたびに、太一が少しずつ村一番の漁師に近づいていくのが分かるので、子どもたちに見通しや達成感をもたせることができたものと思われる。

四　おわりに

木々を集めて森をつくり、子どもたちが全体をとらえ、一時間ごとの活動の意味やつながりを感じながら学習していけるような授業づくりこそが、子どもの活動意欲を引き出し、読解表現力を高めるもとになると考え、実践してきた。系統性をふまえつつ、低学年から少しずつ「木と森の読み」を積み上げていけば、より弾力的に単元に取り入れていけるものと思われる。そのために、今後も多くの実践を積み重ね、可能性を探っていきたい。

あど　ゆうき　子どもに見通しと意欲をもたせることが主体的に読んで表現する活動の原動力であると考え、実践研究に取り組んでいる。